

公募班員の谷藤 学（（独）理化学研究所、チームリーダー）らは目の前にあるものが意識に上っているかどうかを客観的に判断できる視覚刺激法を開発し、その成果を *Journal of Vision* 誌に報告いたしました。

Hayashi, R., and Tanifuji, M. (2012) Which image is in awareness during binocular rivalry? Reading perceptual status from eye movements. *J. Vision*, 12, 1-11

私たちは、普段目の前にあるものは見えていると思っていますが、実際にはその大半は意識に上っていません。意識上にあったりなかったりするのは何故か？どのようにして意識上にあるものが入れ替わるのか？それはどのような神経メカニズムによって起こるのか？これらの問いはそれ自体面白いばかりでなく、「意識」の問題を考える糸口をも与えています。

さて、この問題を、特に脳のメカニズムとして理解しようとする、ヒト以外の動物やまだ意識が形成される途上にある乳幼児を使った研究が有効になります。しかし、問題となるのは、サルや乳幼児に見えているかどうかを問うことができない、あるいは、その報告に100%の信頼を置くことができないことにあります。この研究では、刺激にある工夫を施すことで、客観的に（他覚的に）、被験者（サルや乳幼児）の意識的な見えを検出することに成功しました。これを使うことによって、意識的な見えや意識自体の研究が飛躍的に発展することが期待されます。